第 107 回　歴史リレー講座「秋風と嫉妬　万葉一斑」　上野 誠氏（R5.8.20）

私はこれまで、生まれ故郷の博多、奈良、そして東京に在住したおかげでそれぞれのお国言葉に親しんできました。言葉というものは、その人が生まれ育った環境・国そのものですから、これを学ぶことはその国の歴史を学ぶことにほかなりません。また、言葉を長く使い続けることによって生まれる「手垢」のようなものも、言語を研究するうえで非常に重要です。例えば、この頃は「携帯」というと通常は「携帯電話」を意味します。その結果、家にある電話を「固定電話」と呼び分けるようになりました。外来語も、国と入ってきた時代によって、源流を同じくする言葉でも使い分けます。カード（英語）、カルテ（ドイツ語）、カルタ（ポルトガル語）が好例でしょう。

日本文学の特質を二つ挙げろと言われれば、とりもなおさず「恋」と「季節の移ろい」だと私は答えます。心の動きと自然が一体になっているところに、情緒的な性格、すなわち「説明しなくても分かってもらえる」という妙を感じるからです。気候が温暖で四季のある国に生まれた私たちは豊かな風土とともに暮らしています。さらに、文学においての集団的性格や季語などの決まりごとが多いことも情緒的である要因だと考えられます。

『万葉集』に秋の夜を歌った作品があります。「よしゑやし　恋ひじとすれど　秋風の寒く吹く夜は　君をしそ思ふ」（もう恋なんかするものかと決めていたが、秋風吹く夜はあなたを思い出してしまう）。「秋の夜を長しと言へど　積もりにし　恋を尽くせば　短かりけり」（秋の夜は長いけれども、恋を尽くした夜は短いものだ）。秋の感覚を磨くには、秋を題材にした文学に触れるに限ります。

『万葉集』は待つ女の切ない心情を表した歌も豊富です。古代の一般的な結婚形態は妻問婚（つまどい）（女性宅へ男性が通う）であり、女性は常に待つ身でした。額田王（ぬかたのおおきみ）が近江天皇（近江に遷都した天智天皇のこと）を偲んでこんな歌を詠んでいます。「君待つと　我（あ）が恋ひ居れば　我が屋戸の　簾動かし　秋の風吹く」（今か今かとあなたを待っていると、簾が動いた。やっと来てくれたと喜んだが、それは秋風のせいだった）。期待が裏切られた時のなんとも言えぬ虚しさが伝わってくるではありませんか。状況は違えども、この歌に共感される方は多いのではないでしょうか。

この歌に答えて、額田王と姉妹関係にあるといわれる鏡王女（かがみのおおきみ）が「風をだに　恋ふるはともし　風をだに来むとし待たば　何か嘆かむ」（訪れたのがたとえ風だったとしても思い人を待つあなたはまだマシだ。私は来てくれる人さえいないのだから）と詠っています。実は鏡王女はかつて天智天皇の寵愛を受けていた女性。訪れを待つだけの苦しみと、訪れのない不幸せが好対照をなしています。

恋愛についてまわる負の感情、嫉妬と憎悪は今も昔も変わりません。恋敵と恋人との寝室を夢想し、嫉妬のあまり女の家を焼き払ってしまいたい！あの女の手をへし折ってしまいたい！という激しい内容の長歌があるほどです。しかし、添えられた反歌では、「女に嫉妬するのも、彼をいとおしく想うのも私の心に変わりはない」と、一転して自身の心情を分析しています。愛憎の山と谷をコントロールできないからこそ恋。計算通りにいかないのも恋。現代人だけでなく、万葉びとも同じように恋に身を焦がしていたのです。『万葉集』は私たちにとって恰好の恋愛教科書でもあることがお分かりいただけると思います。

これほど情緒豊かな歌のほぼすべての舞台がここ奈良です。しかし、豊かさとはいったい何を指すのでしょうか。社会が成熟するにつれ、私たちは「幸せって一体なんだろうか」「われわれには今、何が必要なのか」と常に問い続けなければ、真の豊かさを手に入れることはできません。言語や文学ができることを考えてみれば、さまざまな歴史的書籍の中から人間生活そのものを発見し味わうことで、その答えが導き出されてくるはずです。